

公営コレクティブハウジングにおける共用空間の利用に関する研究

正会員 ○山本 梨加*
同 加藤 彰一**
同 毛利 志保***

コレクティブハウジング 共用空間 協同居住
コミュニティ 公営

Abstract

This study aims to find the clue that develops the community by understanding about the use of the common space and the communication between residents, and to clarify the role of the common space in the collective housing(CH).The use of the common space was influenced by the reason for moving into the CH and the distance from their apartment.

1. 研究の背景と目的

近年、少子高齢化が進行するに伴い家族の小規模化・多様化、地域コミュニティの弱体化など、家族の在り方や地域との関わりが変化しつつある。身近な住環境における人間関係が希薄になる中、互いに支え合いながら安心して暮らせる住まいやコミュニティが必要とされている。

コレクティブハウジングは、参加と共生を理念とする住まい方の概念であり、コミュニティ形成に有益であるとされている^{1,2)}が、本研究ではそうしたコレクティブハウジングを取り上げ、共用空間の利用や居住者間の交流からコミュニティ形成を促す手がかりを見いだし、コレクティブハウジングにおける共用空間の役割を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法

研究は以下の手順で行った。

(1)対象住宅における共用空間の利用状況や利用方法の調査および入居者の交友関係などについてヒアリング調査、アンケート調査を行った。(2)得られた意見やデータから、共用空間の利用状況と現在形成されているコミュニティを把握した。(3)共用空間の利用がコミュニティ形成に与えた影響を考察し、コレクティブハウジングにおける共用空間の役割と在り方を明らかにした。

3. 調査概要

3-1. T市における協同居住の導入

T市では、入居者と近隣住民が互いに支え合えるコレクティブハウジングに着目し、現在3住宅が建設されている(表1)。本研究では市営I住宅を研究対象とする。

3-2. 市営I住宅の概要

表2にI住宅の概要を示す。I住宅は、老朽化に伴い、高齢社会に対応しうるコレクティブハウジングとして建て替えられた。アンケート調査(表3)は78世帯に対して実施し50世帯から回答を得た(回収率:64.1%)。

表1. T市営住宅における共同居住型の導入

住宅名	事業	特徴	構造・管理戸数
A住宅	建替	高齢者専用協同居住	RC造2階建・8戸
I住宅	建替	環境共生、高齢者対応	RC造3階建・86戸
M住宅	新築	S I住宅	RC造6階建・75戸

表2. I住宅の概要

外観写真	
敷地面積	15602.73m ²
建築面積/延床面積	1447.27m ² /2807.95m ²
住戸タイプ	1DK(24戸)、2DK(17戸)、3DK(44戸)、2LDK(1戸)(障害者向け)
竣工年月日	平成14年6月
入居年月日	第一期1~3棟 平成14年8月、 第二期4~6棟 平成16年5月

表3. アンケート調査の概要

調査年月	平成21年12月	平均年齢	60.9歳
回収率	64.1%(50/78)	男女比	男:64%、女:36%

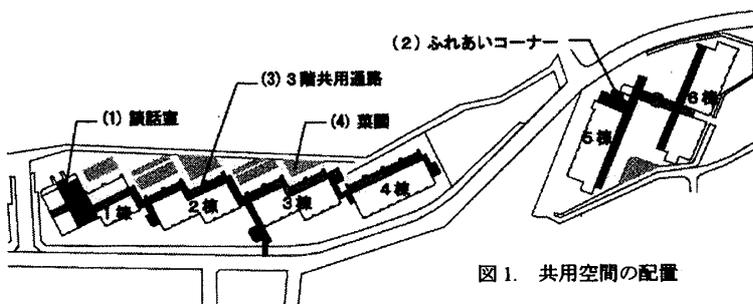


図1. 共用空間の配置

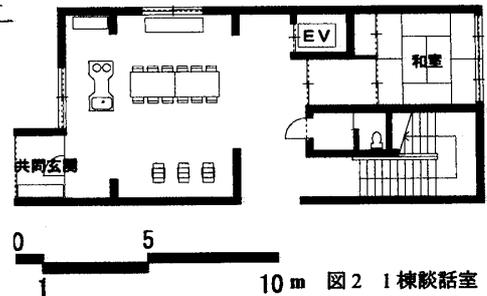


図2. 1棟談話室

A Study on the Use of the Common Space in Public Collective Housing.

YAMAMOTO Rika, KATO Akikazu, MORI Shiho

4. 1住宅における共用空間

I 住宅は設計段階から豊かな共用空間が計画された(図1)。以下に主なものを述べる。

(1) 1棟談話室(図2、写真1)

1棟の共同玄関も兼ね、アクセスは談話室を通るよう設計された。また、キッチンや和室も併設されている。

(2) 5棟ふれあいコーナー

隣接した障害者向け住戸と引き戸で仕切られ、他の居住者と交流が図られやすい工夫がされている。

(3) 3階共用通路(写真2)

当階は高齢者世帯向け住戸であり、裏路地をイメージして設計された。通路の幅は広く採られ、花壇やベンチが設置されている。

(4) 菜園

居住者が自由に利用でき、次世代に引き渡せる育成型管理方式を採用している。

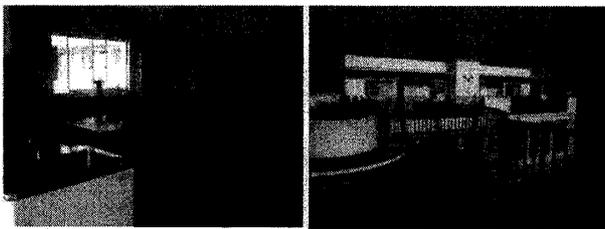


写真1. 1棟談話室

写真2. 3階共用通路

5. 調査結果

居住者を対象としたアンケート結果により考察する。

図3に交流場所の割合を示す。最も多いのは、「共用通路」(56.5%)、次が「住戸内」(43.5%)である。交流の場として談話室を利用する人は少なく、共用通路や菜園などでの交流が多い。

次に談話室の利用方法を見ると(図4)、「集会や会議」

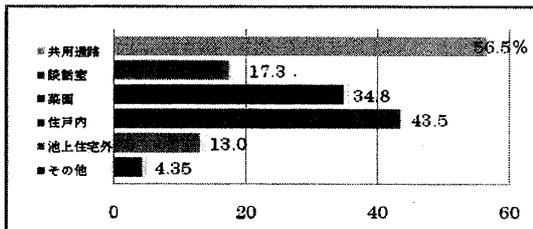


図3. 交流場所(複数回答)

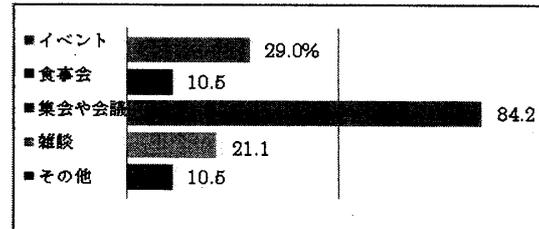


図4. 談話室利用方法(複数回答)

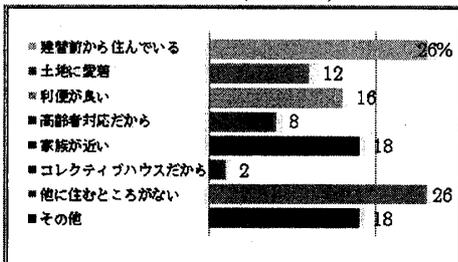


図5. 入居理由(複数回答)

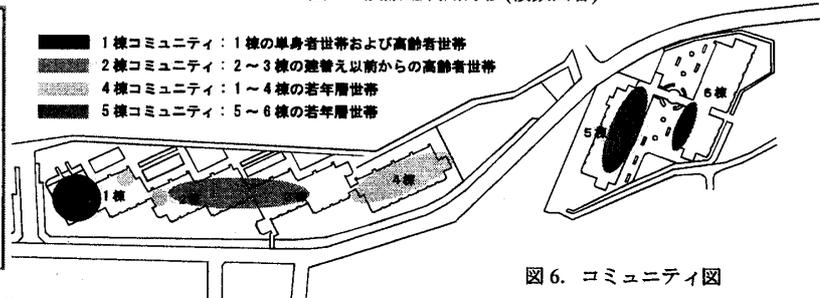


図6. コミュニティ図

(84.2%)が最も多く、次に「イベント」(29%)となっており、食事や雑談など日常的な利用は少ないことが分かる。

また、入居理由を見ると(図5)、「建替前から住んでいる」、「他に住むところがない」が最も多く(26%)、「コレクティブハウジングだから」という回答は2%のみであった。つまり、ほとんどの居住者がコレクティブハウスという形式に消極的であることが分かる。

6. コミュニティの形成

ヒアリング調査により、4つのコミュニティが確認できた(図6)。主に棟ごとに世代や世帯構成などを共通点にコミュニティを形成していた。談話室を利用するコミュニティは1棟と4棟のコミュニティのみであった。談話室を共同玄関として利用する1棟のコミュニティは、談話室で日常的交流がなされ、談話室の利用がコミュニティ形成の要因の一つとなっていることが認められたことから、共用空間と住戸の配置も重要であることが分かった。

7. まとめ

共用空間の利用が居住者間の交流を促し、コミュニティの形成を促進させるが、積極的に共用空間を利用しない居住者も認められた。共用空間は日常生活の中で意図しないで参加でき、自然な交流を図れる場であることが望ましい。本研究では建替え等による居住者の共同居住への意識の低さ、共用空間の在り方などの課題が見出された。今後の入居者への協同居住に対する理解の促進や共用室での持続可能な交流と活動の提案が必要である。

参考文献

- 小谷部育子, 岩村和夫, 卯月盛夫, 延藤安弘, 中林由行: 共に住むかたち, 建築資料研究社 1997年
- 小谷部育子: コレクティブハウジングのすすめ, 丸善 1997年
- 櫻井典子: コレクティブハウジングにおける住コミュニティの発達と支援に関する研究, 日本女子大学学位論文 2003年
- 藤根六平: 高齢者住宅としてのコレクティブハウジングのあり方—豊橋市営住宅の高齢者向け協同居住型, 豊橋科学技術大学卒業論文 2007年

* 三重大学大学院工学研究科 博士前期課程
 ** 三重大学大学院工学研究科 教授・工博
 *** 三重大学大学院工学研究科 助教・工博

* Graduate Student, Graduate School of Eng., Mie Univ.
 ** Prof., Graduate School of Eng., Mie Univ., Dr. Eng.
 *** Assistant Prof., Graduate School of Eng., Mie Univ., Dr. Eng.